

5月のハイライト

遺伝子塩基配列の決められた作物が増えてきている。コムギの遺伝子組換え或いはゲノム編集がなかなか進まない中で、「480のコムギ品種のゲノムはその進化と人間の社会文化的な歴史を明らかにした」ことは、今後のコムギ研究が遺伝子レベル一層進むことが期待できそうである。また、「野生のトマト遺伝子が害虫抵抗性育種の鍵遺伝子である」との成果は、これからの遺伝子の知見を利用した急速な育種が進むものと期待ができる。この他ピーナッツの塩基配列の件きゅにも大きな進歩があった。また、インドでは「耐塩性イネ品種」の開発が着々と進展していることは、素晴らしいことである。

日本からの話題として「日本の厚生労働省がゲノム編集食品の政策を決めた」と話題に取り上げられているが、その中身は、先に書いたようにゲノム編集で改良した食品は、新たな遺伝子を組み込んだり、異種の遺伝子が入らなければ届出でよいとのことであり、そこまで書かれていないことはあまり話題にもならない。これに対してEU特にデンマークからは、**University of Copenhagen** と **the Technical University of Denmark** の人の研究者は、GMO作物のリスクと自然でないことで欧州連合(EU)における遺伝子組換え生物(GMO)の制限的規制を正当化できないと主張している。研究者らは、EUの規制は、より持続可能で気候に優しい解決策を提供することができる重要な農業革新の邪魔になり得ると述べている。GMO作物が環境と人々にもたらすリスクが同等である場合、GMO作物は、同様な製品とは異なる扱いをするべきではないと強調しています。これは、「22のヨーロッパの企業組織はEUの革新的な植物の育種規則を呼び掛け」とも同様のことである。これらは、私(富田)が以前より主張しているようにプロセスではなく、プロダクトで判断すべきとするものである。今回は、コペンハーゲン大学のAndreas Christiansen氏は、組成が異なる新品種の導入は、それらが遺伝的に改変されているかどうかにかかわらず、常にリスクをもたらすと述べた。著者らは、GMO作物が環境と人々にもたらすリスクが同等である場合、GMO作物は、同様な製品とは異なる扱いをするべきではないと強調しています。

何時になったら本当に日本が科学技術立国を標榜するにふさわしい国になるのか心配しているのは私だけなのだろうか？